

2	一宮	一宮市立千秋東小学校	いまえだ まさき 名前 今枝 真基
分科会番号	12	分科会名	自治的諸活動と生徒指導 (小学校)

## 研究題目

### 未来を拓く 心豊かでたくましい児童の育成 ～コーチングを通し、自立して生きていける児童の育成を目指して～

## 研究要項

### 1 主題設定の理由

現代、人種や性別、宗教、価値観、障がいといった様々な属性をもった人達が組織の中で共存している状態を表すダイバーシティ(多様性)化が進んでいる。教育現場においても、学習の理解度や身体的な発達だけでなく、学習意欲や課題への取り組み方など児童自身の問題と表情や話す言葉、家庭環境など児童を取り巻く環境などの違いが多方面にわたり大きくなっている。そのため児童の考えが違っていることを認め、その違いを生かす学級を作っていくことや画一的な教える指導、いわゆるティーチングだけの指導を見直すべきだと考える。小学校学習指導要領・特別活動編において、学級活動の目標に「学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。」とある。つまり、積極的に多くの人と関わり、その時々で自分で考え、判断し、答えをみつけていくことができるようにする「自立した児童」を育成していかなければいけない。

4月末、本学級の児童(対象 6年1組 計21名)にアンケートを実施した。「みんなのために進んで行動したり意見を伝えたりすることができますか」という設問では、「進んで行動したり意見を伝えたりすることができる」と答えた児童は僅か約10%に対し、「人から言われたことや決められたことに対して行動することができるが、自分からはできない」と答えた児童は約80%もいることが分かった。理由を聞いてみると、「自分の意見があっても否定されるのが怖い」「周りの子が聞いてくれなかったらどうしよう」といった周りの環境に起因する意見もあれば、「私なんかやらなくても誰かがやってくれるからいい」「どうせ自分の意見なんて・・・」といった自己肯定感が低いことが原因ともとれる意見も多かった。

自分の意見を伝えることを恐れ、また自己肯定感が低いのは、児童同士での関わりの在り方、そして、ティーチング中心といわれる私自身の今までの指導の在り方に原因があるのではと考えた。

片山紀子氏(2017)によると、「コーチングは、子供自身に考えさせて、子供が自分で判断し、自立して生きていくことを後押ししていくもの」とある。また、「子供自身ですら自覚していない可能性を目覚めさせることがコーチングの目的」とも述べていた。

そこで、本学級の状況をふまえ、「コーチング」を積極的に取り入れることにした。特にコーチングの柱となる「傾聴」「承認」「問いかけ」に焦点化し、教師からのコーチング、また児童間でのコーチング(ピア・コーチング)をすることにより、主体的に考え行動する自立した児童を育成できるのではないかと考え、本主題を設定した。

## 2 研究の構想

### (1) 目指す児童像

様々な問題を当事者として考え、判断し、自立して行動できる児童

### (2) 研究の仮説

#### 仮説

児童がコーチングの3つの柱である「傾聴」「承認」「問いかけ」を活用したコミュニケーション活動やピアコーチングに取り組んだり、教師がコーチングの3つの柱を活用した授業実践や個別コーチングを繰り返し行ったりしていけば、児童自身が意欲的に考え、判断し、自ら行動できるようになるだろう。

### (3) 研究の手立て

#### <手立て1>コーチングの動機づけ・基礎作り

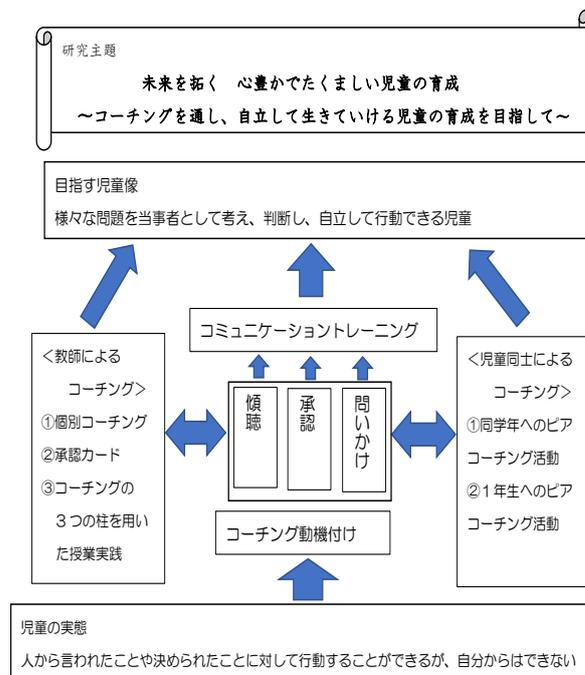
- ・児童のアンケートからなぜコーチングを学んでいくかを全体共有する。
- ・コーチングの3つの柱(傾聴、承認、問いかけ)を理解する。
- ・3つの柱(傾聴、承認、問いかけ)を用いたコミュニケーショントレーニングを行う。

#### <手立て2>教師によるコーチング

- ・個別コーチングの実践
- ・承認カード
- ・コーチングの3つの柱を用いた授業実践

#### <手立て3>児童同士によるコーチング

- ・同学年へのピアコーチング活動
- ・ペア学年(1年生)へのピアコーチング活動



### (4) 研究の構想図(資料1)

右図のように研究の構想を立て、研究を進めていく。

### (5) 仮説の検証方法

本研究の仮説は、令和6年度6年1組21名とし、変容を、4・7月のアンケートや児童の活動の様子、授業や活動後のアンケート、感想をもとに検証する。

#### <抽出児童について(児童A、児童B)>

	児童の実態	教師の願い
児童A	・言葉遣いが悪く、友達を煽ることが多い。また自己肯定感が低く、自分から進んで行動することができない。	・使う言葉を変えていき、自分で判断し周りの為に、進んで行動できるようにしていきたい。
児童B	・間違いを恐れるため、自分から進んでチャレンジすることが苦手。指示の後ではないと動き出すことができない。	・学級全体の問題などに、当事者意識をもたせ、自分から考えて行動できるようにしていきたい。

## 3 研究の実践

#### <手立て1>コーチングの動機づけ・基礎作り

ア:児童のアンケートからなぜコーチングを学んでいくかを全体共有する。

4月に学年目標である「HERO(ヒーロー)」(資料2)になるためには、何が大切かを問うアンケートをとった。「自分で考え意見を伝えること」や「すぐ行動に移すこと」などといった自分から行動(自立)していくことが大切といった意見や「友達の気持ちを理解して笑顔にさせること」や「周りの人を勇気づけられること」などといった相手を変化させることが大切といった意見が出てきた。これらの意見をもとに、自分自身の自立、且つ友達の自立をサポートするために「コーチング」が必要であると伝えた。



資料2: 教室掲示

イ:コーチングの3つの柱(傾聴、承認、問いかけ)を理解する。

傾聴とは、相手の言うことを否定せず、耳も心も傾け相手の話を聴くこと。承認とは、相手をよく観察して、言葉にして伝え、認めること。問いかけとは、相手の中にあるものを引き出すこと。まずは、この3つを互いに(教師も児童も)あらゆる場面で使用していこうと共通理解を図った。(資料2)

ウ:3つの柱(傾聴、承認、問いかけ)を用いたコミュニケーショントレーニングを行う。

#### ①傾聴トレーニング+振り返り

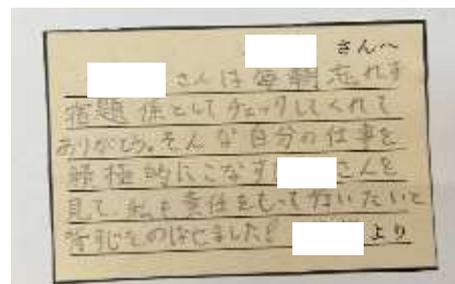
ペアで話す人と聞く人に分かれ、自分の好きな〇〇(スポーツ、食べ物等)を30秒間話し続けることを条件付きで行った(資料3)。1回目は、相手の目を見ないで、聞く。2回目は、体を話す人に向け、相槌を打ちながら聴く。2回目を実施した後に感想を聞いた所、「1回目は、自分が話をしているにもかかわらず聞いてくれないから段々と喋るのが辛くなった。」「2回目は、ペアの子が自分の言った事に相槌をうってくれたり、目を見て聴いてくれたりしたから、どんどん話をしたくなって、あっという間に時間がたってしまい、もっと話をしたかった。」と多くの児童が聴く人の聴き方が話し手にかなり大きな影響を与えていることを理解した。



資料3：傾聴トレーニング

## ② 承認トレーニング+振り返り

ペアの良いところを「事実+意見」で伝えることを確認し交代で取り組んだ。承認は、相手の存在、行動や努力を肯定的に認め、相手にその事実を気持ちを込めて伝えることが大切であり、そのためには相手をよく観察することが承認の第一歩であると全体で共有した。その事実を伝えた後にYOUメッセージではなく、Iメッセージを使い、自分の気持ちを相手に伝えようと話をした。傾聴トレーニングと同じように、YOUメッセージとIメッセージ(資料4)の比較体験も行ったところ、児童からは「YOUメッセージは、なんか距離がある感じがする。逆にIメッセージは、気持ちが込もっていて嬉しかった。」とIメッセージを肯定的に捉えて使ってみようという児童も多かった。



資料4：児童が書いたIメッセージの一例

## ③ 問いかけトレーニング+振り返り

ペアで30秒間に何個問いかけができるかをまず取り組んだ。その後、どんな問いかけをしたか全体で確認をした。問いかけには、大きく2つあること(クローズドクエスチョン、オープンクエスチョン)を確認し、「コーチングの目標からするとどういった問いかけをしていったらいいだろう。」と問いかけ考えさせた。児童からは「例えば、『サッカーは好きですか?』といったクローズドクエスチョンは、話が深まらないから相手の中にあるものを引き出せない。逆に、『どんなスポーツが好きですか?』といったオープンクエスチョンは、相手に考えてもらうことができるから、何か気づいてもらえるかも。」といった意見があり、コーチングや相手の自立をサポートするためにはオープンクエスチョンが効果的であると全体共有をした。

## ④ Good & New(傾聴中心)

①から③のトレーニングをペアで取り組んだ後、傾聴、承認、問いかけを用いたコミュニケーショントレーニングを朝の時間等に継続的に行った。まず、Good & Newトレーニングでは、最近嬉しかったこと、新しく発見したことを30秒以内で伝えあうトレーニングをした。聴く児童は、傾聴し、どんな意見でも大きな拍手をして友達を認める事を約束し取り組んだ。話す児童も前を見て全体に伝わるように話すことで自己表現力を高める場となった。

## ⑤ サイコロトーキング(傾聴+問いかけ)

サイコロを各班に1つ用意し、「私の宝物」など各目に出た内容を一人30秒以内で話をして、その後5W1Hを使った問いかけ(オープンクエスチョン)をした(資料5)。児童の感想には、「話すことは緊張したけど、みんなが私の話を聞いてくれて嬉しかった。質問してくれたことで新しい発見があった。」と児童にとって新たな気づきとなる場になった。



資料5：サイコロトーキング

## ⑥ 承認のシャワー(傾聴+承認)

②の承認トレーニングではペアで行ったが、クラス全体で一人一人に承認の言葉をシャワーのように浴びせようという目標で取り組んだ。具体的には、毎日一人の主役を決め、朝の会でスピーチを行った。内容は、1学期頑張ったこと、クラスみんなに今伝えたいことの2点である。スピーチ後には、一人



資料6：主役の子に承認メッセージを送る児童

一人が今日の主役に対し②の承認トレーニングで行った「事実＋意見」を用いて気持ちを込めて伝えた(資料6)。その言葉を一人一人が紙に書いて今日の主役にプレゼントをした。合計21回(人数分)取り組んだ。

### <手立て2>教師によるコーチング

#### ア:個別コーチング

6月に学校全体で取り組む教育相談の時間を活用し、個別コーチングを児童全員に行った。具体的なコーチングの流れは、3つの手順を踏んで取り組んだ。①現状確認(1学期の振り返り)②目標設定(〇〇な自分になりたい)③行動計画(具体的)を事前に書かせ、自己分析をさせてからコーチングを行った。抽出児童Aは、自分ではなかなか振り返ることができなかったため、当日教師の「問いかけ」により、1学期の振り返りを行った。以下に具体的に抽出児童Aと教師のやり取りを示す。

教師:「Aさん、昨日の連絡帳の字、すごく丁寧だったから、先生気持ちよく見ることができ、うれしかったよ。1学期がんばったね…(場の安心を与える)ところでAさん、自分なりに振り返って1学期どうだったかな?(①現状確認)」  
児童A:「うーん、言葉遣いが悪かった。自分にも友達にもイライラしてしまうことがあった。」  
教師:「そっかあ。どういった言葉がAさんにとって悪いと思うの?」  
児童A:「ダルイ、面倒くさい、ウザイ…」  
教師:「なるほど、でも、Aさんがそういった言葉を悪いと捉えているのは、良いと思うよ。」  
児童A:「でも、悪いと思ってもイライラすると使ってしまうんだ。」  
教師:「うんうん。そうだね…Aさんの表情を見ていると自分の中で本当に変えていきたいという思いが先生によく伝わってきます…これからの自分、どうなりたい?」  
児童A:「できるなら、言葉遣いを変えたい。(②目標設定)」  
教師:「なるほど! どういうふうに変えたいの?」  
児童A:「えーと、ポジティブな言葉を使っていける人になりたい。」  
教師:「いいね。どんな言葉がポジティブな言葉?」  
児童A:「ありがとう、ごめん、がんばる…とかかな?」  
教師:「そうだね。すごく良い目標を持ってたね。早速、行動するためにどうしたらいいかな?(③行動計画)」  
児童A:「えっ! うーん…まずは、プリントとか友達にもらったらありがとうと言ってみようかな。それと…」

このような流れで、コーチングの3つの柱「傾聴」「承認」「問いかけ」を用い個別コーチングを行った。決して教師から答えを言うのではなく、児童自身に考えさせ決めていくことを目標に取り組んだ。

#### イ:コーチングの3つの柱を用いた授業実践

授業の中でも、傾聴、承認、問いかけの場面を数多く作った。グループ活動においては、傾聴はもちろん、本校が取り組んでいる風車トーク(資料7)を用いて、一人が言った意見に対してグループ全員が反応する取り組み(承認や問いかけ)も授業内の話し合い活動で取り組んだ。



資料7: 風車トーク

#### ウ:承認カード

教師自身の思いを「事実＋意見」でカードに書き、朝の会の時に全体に伝え教室内に掲示した(資料8)。個人やクラスの成長できたところ(成長承認)、みんながいてくれてありがとう(存在承認)など教師の1メッセージをみんなに伝えた。



資料8: 承認カード

### <手立て3>児童同士によるコーチング

#### ア:同学年へのピアコーチング活動

教師と児童のコーチングだけではなく、児童同士がコーチングをする人(コーチ)、受ける人(クライアント)に分かれペア(交代制)で行った(資料9)。「傾聴」「承認」「問いかけ」をベースに前述したコーチングの流れ(①現状確認②目標設定③行動計画)をもとに取り組ませた。6月末に第1回目を行ったので6月の振り返りから、7月終業式までの目標、行動計画についてピアコーチングを行った。コーチ側は、初めての取り組みで「問いかけ」を考えることに



資料9: ピアコーチング活動  
(6年生)

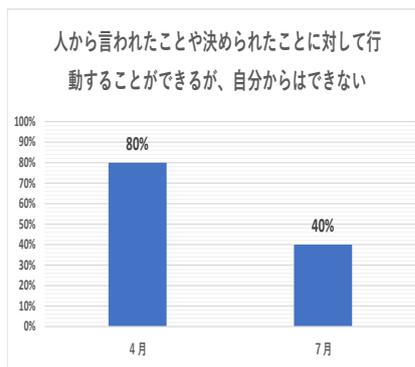
時間がかかる児童もいたが、クライアントの話をよく聴き、その意見に対して承認することができていた。クライアント側の感想に、「コーチ側の問いかけ(なぜ、スピーチ発表する時に下を向いてしまうのですか?)から、深く自分で考えることができた。ただ恥ずかしいのではなくて、原稿をただ読んでいて、自分のことしか考えていなかった。これからは、相手に伝わるように考えてスピーチしたい。」とコーチの「問いかけ」をきっかけに自分で考えて目標を立てることができた児童もいた。

### イ:1年生へのピアコーチング活動

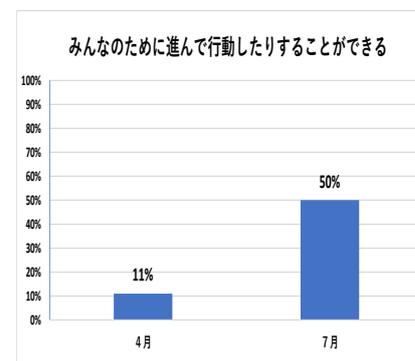
ペア学年(1年生)にも6年生がコーチとしてコーチング活動を行った。7月に第1回目の1年生ピアコーチング活動を行うことを目標に4月から6月までは、「傾聴」「承認」「問いかけ」を中心に1年生との関係づくりを行った。1年生と6年生の教室が隣ということもあり、放課に遊んだり、学校行事をペア学年で取り組んだり、触れ合う時間は多くあった。第1回目では、ペアの1年生に「1学期にがんばったこと」を話をしてもらった(資料10)。なかなか言えない1年生もいたので、「国語か算数か体育か、何が楽しかった?」と具体的に「問いかけ」をして1年生に発言を促す児童もいた。その後、「もっとできるようになりたいこと」を聞いていった。(状況に応じて、行動計画を立てても良い)児童(6年生)の感想には、「同じ学年の子とちがって、1年生には言葉を選んで質問しないと伝わらないから難しかった。でも、目を見て話を聴いたり、意見を承認したりしたら1年生がすごく話をしてくれてうれしかった。」という意見があった。



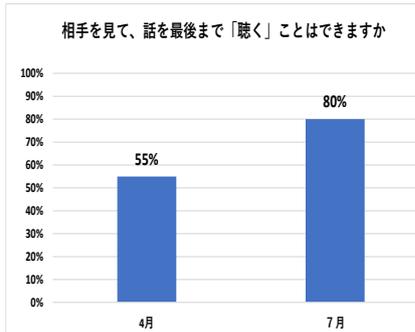
資料10:ピアコーチング活動  
(1年生)



資料11:4・7月アンケート比較①



資料12:4・7月アンケート比較②



資料13:4・7月アンケート比較③

## 4 成果と課題

### (1)研究の成果

本研究で目指す児童像(様々な問題を当事者として考え、判断し、自立して行動できる児童)に沿って、成果と課題を明らかにする。

「人から言われたことや決められたことに対して行動することができるが、自分からはできない」という項目では、80%(4月時)から40%に大幅に減少(7月時)したことが分かる(資料11)。一方「みんなのために進んで行動したり、意見を言ったりすることができる」という項目では、11%(4月時)から50%(7月時)に大幅にアップしたことが分かる(資料12)。これらの結果から、児童が自分で考え、自立して行動できるようになってきたことが明確に言える。

この結果をもたらしたのは、次の3つの点が有効に働いたからと考える。

#### ① コーチングの柱である「傾聴」の有効性

「相手を見て、話を最後まで「聴く」ことはできますか」という項目では、55%(4月時)から80%(7月時)に増えた(資料13)。傾聴を様々な場面で取り入れたことにより、どんな意見でも自分の話を聞いてくれるといった場の安心感が生まれた。児童の感想にも、「目を見てうなずきながら僕の話の聴いてくれるから、どんどん意見を言おうと思えた。意見を伝えたことで、やる気が出てきて行動にもつながったと思う。」などと、傾聴を積極的に取り入れたことにより、児童同士の信頼関係も深まり、主体的に自分から行動できるように変化していった。

#### ② コーチングの柱である「承認」の有効性

「友達の良いところなど、言葉にして伝えることができますか」という項目では、28%(4月時)から47%(7月時)に増えた(資料14)。特に、6月中旬から毎日取り組んだ「承認のシャワー」がきっかけで承認の

良さを感じ取っていた。感想に、「毎日、主役の子をよく見ていると、普段意識していないその子の良さを発見できた。承認とは、まずしっかり見ることから始まると思った。そして言葉に出して伝えると、相手も嬉しくなるし、自分も幸せな気持ちになった。」などと、意識的にクラスの子をよく観察するようになっていった。「承認のシャワー」の時だけでなく日常でも「昨日の算数の授業で久しぶりに手をあげたよね。ナイスチャレンジだよ。」などと承認し合える雰囲気が広がっていった。

また、「自分はクラス全体から認められていますか」という項目では、33%（4月時）から50%（7月時）に増えた（資料15）。抽出児童Bの「承認のシャワー」を受けた後の発表では、「承認のシャワーを浴びて、クラスの皆から自分のことを認めてもらえてうれしかった。今まで、周りを気にしすぎて自分から動くことができなかつたけど、これからは、みんなのために動きたい。」と述べていた。その言葉通り、授業中の挙手は増え、放課時には新たなコミュニケーションの場を自分から広げていた。抽出児童Bだけでなく、承認を受けること、承認をすることでクラスの雰囲気が温かくなり、意欲的に行動できる児童が増えていった。

### ③ 児童同士のピアコーチング活動の有効性

「ピアコーチングをやってみてどうでしたか」という項目では、すごくよかった（50%）、よかった（30%）と多くの児童がコーチングの良さを感じ取っていた。その理由は、「7月の目標をコーチ役に伝えたら、自分の話をすごく聞いてくれたり、承認してくれたりして頑張ろうと思えた。さらに自分でも驚いたのは、コーチの質問によって目標を深く考えることができ、今まで考えたことがないような事も考えることができよかつた。」からと児童自身が今までは考えたことのないような新たな視点を持ったり、コーチングを通して意欲的に行動しようという気持ちが高まったりした。抽出児童Aも感想に「自分の言葉遣いが良くないことをコーチ役に伝えたら、しっかり目をみてうなずきながら聴いてくれたことがすごくうれしかった。急に転校する事になってすごく不安だけど、コーチングで学んだことを次の学校でもやっていきたい。」と前向きに行動しようという姿勢が伺えた。

以上のことからコーチング活動を通して、児童が自分で考え、自立して行動できるようになってきたと考える。

## (2) 今後の課題

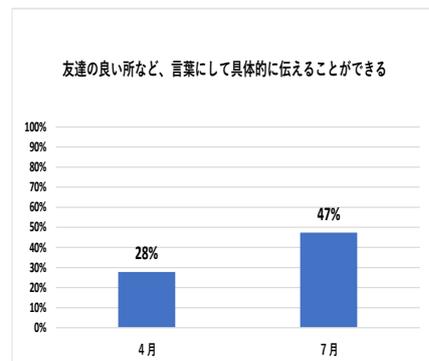
① 今回のコーチングの実践は、第6学年を中心に取り組んだ。学校全体としては共通理解を図ったが、全学年で取り組むことはできなかった。児童の発達段階に応じてスモールステップで長期的に取り組むことで学校全体として主体的に取り組む児童の育成に繋がると強く感じる。

② 4月から7月の短期的な取り組みの中、「傾聴」、「承認」の力は高まったと感じる。しかし、相手の中にあるものを引き出すための「問いかけ」の力を伸ばすことができなかつた。効果的な「問いかけ」をするためには、話の流れを理解するための国語力が必須であると感じる。また、5W1Hを用いたオープンクエスチョンをどの児童も授業の中で繰り返し使っていかなければいけないと考える。教師自身も「傾聴」「承認」「問いかけ」を使い、児童の主体性を更に高め、未来を拓く心豊かでたくましい児童の育成を今後も進めていかなければならないと切に感じる。

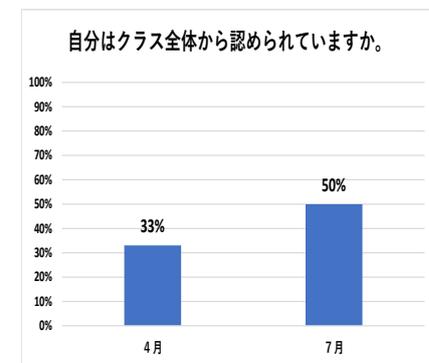
## 5 参考文献

### 参考文献

- ・知っているつもりコーチングー苦手意識がなくなる前向き生徒指導 片山 紀子 学事出版2017
- ・「深い学び」を支える学級はコーチングでつくる 若松 俊介 ミネルヴァ書房 2017
- ・対話力がグングン高まる！コミュニケーション・トレーニング 橋本 慎也 明治図書出版 2021



資料14：4・7月アンケート比較④



資料15：4・7月アンケート比較⑤